ジョイセフ・パートナーシップ・プログラム（JPP）

ジョイセフ JOICFP
途上国の妊産婦と女性を守る

アフガニスタン
妊産婦と女性を守る保健推進プロジェクト2012年報告書

アフガニスタンの妊産婦と女性の命と健康を守るために

2012 年 1 月から 3 カ年の計画で現地協力団体のアフガン医療連合センター（UMCA）との協働で「妊産婦と女性を守る保健推進プロジェクト」を開始しました。
アフガニスタン東部ナンガハール州ベスード県ジャララバード市の母子保健クリニックを拠点とし、周辺の農村地域における以下の活動を通して、安全な妊娠と出産の促進に努めています。

1．母子保健に関する啓発活動の実施
2．母子保健クリニックでの保健医療サービスの提供
3．子どもたちへの保健教育指導

アフガニスタン基本データ

・人口*：3340 万人
・面積：652,225 ㎢　（日本の約 1.7 倍）
・首都：カブール
・人種：パシュトゥーン人、タジク人 他
・公用語：ダリー語、パシュトゥー語
・宗教：イスラム教
・平均寿命*：49 歳（男女とも）
・合計特殊出生率（1 人の女性が一生に産む子どもの平均数）*：6.0 人（日本 1.4 人）
・妊産婦死亡率（出生10万対）*：460（日本 6）
・5 歳未満児死亡率（出生千対）*：184（日本 3.3）
・中等教育就学率*：男 34%、女 13%
（日本 男 99%、女 100%）
＊出典：「世界人口白書 2012」

課題

・長く内戦が続いたアフガニスタンでは、教育や保健医療に係る基盤が大きなダメージを受けました。保健医療サービスが十分に受けられないために、今でも 5 人に 1 人の子どもが 5 歳の誕生日を迎えるまでに亡くなり、また、出生 10 万に対し 460 人の女性が妊娠や出産が原因で亡くなっています。

・アフガニスタンの女性の約 6 割は、医師や助産師の介助を受けずに自宅などで出産しています。このため、母体に異変が起きても治療を受けられず、多くの妊産婦が感染症や出血多量などで命を落としています。

・15 歳以上の女性の約 8 割は読み書きができず、また農村部では女児の多くが十分な教育を受けないまま 10 代で結婚することも少なくありません。読み書きができないことは、女性が自分や家族の健康を守ったり、赤ちゃんを安全に産み育てるための情報や知識を十分に得られないことを意味し、高い妊産婦及び乳幼児死亡率の背景ともなっています。

母子保健支援事業

プロジェクト概要

目的：母子保健に関する情報とサービスをより多くの妊産婦と女性に届け、母子保健を向上する。
プロジェクト期間：2012 年 1 月～ 12 月
現地協力団体：アフガン医療連合センター
対象地域及び人口：ナンガハール州ベスード県、シェワ県　3 万 7000 人
支援協力：三菱東京 UFJ 銀行及び三菱東京 UFJ 銀行社会貢献基金、公益財団法人ベルマーク教育助成財団、
全国電力関連産業労働組合総連合他、企業・団体・個人からの寄付金

活動の成果

1）農村を中心に母子保健の啓発活動を実施

助産師の資格を持つ保健スタッフ（ヘルスエデュケーター）を新たに加え、ベスード県ジャララバード市近隣の農村 10 村で母子保健の啓発教育を行いました。

ヘルスエデュケーターは、村の各家庭を巡回訪問し、産前産後健診と保健医療施設での出産の大切さを説き、受診と施設分娩を呼びかけます。
2012 年は、約 3000 家庭を訪問し、延べ約 1 万人の女性に直接母子保健に関する大切なメッセージを伝えました。また、ヘルスエデュケーターは、母子保健クリニック（セントラルクリニック）の助産師や保健スタッフとも協力し、クリニックを訪れた妊産婦と女性延べ約 6200 人に啓発教育を行い、また 1300 人を超える女性に個別カウンセリングを行いました。

「村にきてくれた助産師から妊産婦健診やクリニックで出産することの大切さを教わるまで、自宅で出産することが当たり前だと思っていました。今では、私から、村の女性たちに、クリニックに行くよう呼びかけています」
（写真右）リザさん（35 歳）、ベスード県

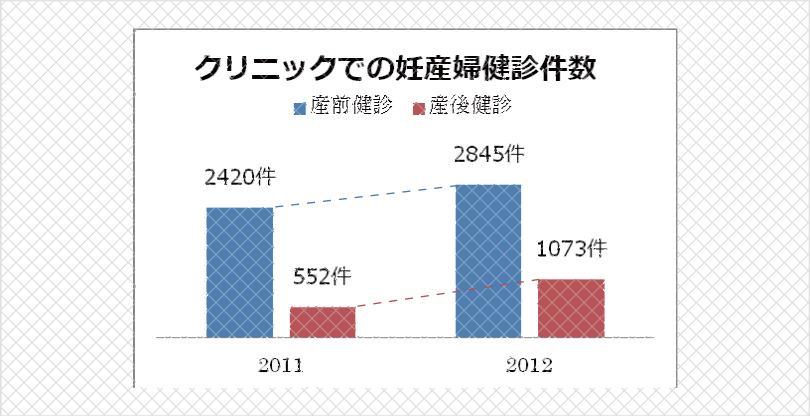
巡回訪問による啓発活動

2）母子保健クリニックで保健医療サービスを提供

ジャララバード市近郊農村の妊産婦と女性、子どもたち延べ 2 万 2000 人に対し、保健医療サービス及び産前・産後ケア、施設分娩、避妊薬（具）の提供、予防接種など母子保健に関連したサービスを提供しました。

また、ヘルスエデュケーターによる啓発教育活動推進の結果、産前産後健診の件数が、前年より大幅に増加しました。

診察までの待ち時間を利用した啓発活動



3）子どもたちに保健衛生に関する知識を広める

保健推進員として育成した 150 人の小学校の教師を通じて、ベスード県、シェワ県の 13 の小学校の児童 1 万 2000 人に、保健衛生、感染症予防などに関する保健教育を行いました。また、ランドセル配付時にも、保健スタッフから保健衛生について指導しました。

教育支援事業

想い出のランドセルギフト

2004 年から、ナンガハール州の子どもたちにランドセルを配付しています。
2012 年には、6 月に日本を出発した 1 万 6722 個のランドセルを、学用品やろうそくと一緒に、ベスード県、ダレエヌーア県の 29 の小学校児童に配付しました。

妊娠や出産が原因で亡くなる女性の命を救う第一歩は、女性自身が知識を持つこと。
それは、赤ちゃんを安全に産み育て、自分と家族の健康を守ることにもつながります。ランドセルは、女の子が学校へ行くための、きっかけづくりに大きく役立っています。

「学用品を家で用意できなくて困っていた時に、日本から、素敵なランドセルとノートや鉛筆まで届いたのでびっくりしました。学校に行っていっぱい勉強します」

シャーさん（10 歳）、ダレエヌーア県

「毎日、ランドセルを背負って学校に通っています。学校で、先生から衛生について学び、下痢に悩まされることがなくなり、とてもうれしいです」

シャジアさん（11 歳）、ダレエヌーア県

物品寄贈による支援

日本国内のリサイクルされた衣料を母子保健の啓発教育セッションに来た妊婦や女性、またランドセルをプレゼントした子どもたちに寄贈し、啓発教育の推進に役立てました。

ジョイセフスタッフより一言

TV やラジオなどのコミュニケーション手段が十分に普及していない貧しい農村部では、人から人へと情報を伝えていくことがもっとも有効な手段となります。その一方で、治安悪化の影響や、アフガニスタンのイスラム社会、特に農村部の多くでは、女性の自由な行動が制限されているために、女性の保健スタッフが村の女性たちを訪問し、母子保健について話すことそのものが、NGO にとってはチャレンジとなります。
このような背景のもと、2012 年のプロジェクトでは、女性のヘルスエデュケーターを育成し、プロジェクト対象地域の村々で母子保健の啓発教育を始めました。その成果は、産前・産後健診の増加として表れてきています。ジョイセフでは、これからも地域に根差した啓発教育活動を継続的に推進し、より安全な妊娠や出産が可能な環境づくりに取り組んでいきたいと思います。みなさまのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。（柚山）